

平成23年度

事業報告書

(平成23年4月1日から平成24年3月31日まで)

学校法人 北陸大学

目 次

I	大学の特徴	
1	建学の精神	1
2	教育理念	1
3	教育目標	1
II	法人の概要	
1	設置する学校・学部・学科等	2
2	所在地	2
3	沿革の概略	3
4	組織図	4
5	役員・教職員の概要	5
6	設置する学校・学部・学科の名称及び入学定員と学生数	5
III	事業の概要	
1	事業の概況	6
2	主な事業の進捗状況	6
IV	財務の概要	
1	資金収支計算	13
2	消費収支計算	14
3	貸借対照表	15

I 大学の特徴

1 建学の精神

「自然を愛し、生命を尊び、真理を究める」人間形成

2 教育理念

教育は、より成熟した人間が成長途上にある人間を望ましい人間に育成・創造していくための意図的・計画的な人間形成の行為である。その原点は、教える者が、愛情と情熱によって学ぶ者の心を開き、もって互いの全人格を真摯にぶつけ合う魂の触れ合いにある。

本学は、建学の精神のもと、教育に注ぐ限りない情熱、惜しまない時間、並びに開発された独自の優れた教育方法の相乗効果をより高め、学生一人ひとりの可能性を十分に伸ばす卓越した教育を実践する。

3 教育目標

建学の精神である「自然を愛し、生命を尊び、真理を究める人間形成」を実現するため、自然の一部である人間として自然を畏敬し、調和して行動する能力を養う。

「学ぶに如かず」(論語) 一生を通じて学び続ける姿勢を養う。

未来を創造する地球人として、的確な歴史観・世界観のもと、人類の平和と繁栄に貢献する人材を養う。

グローバル・アイの視野を持ち、特に東アジアに眼を向け、英語・中国語を駆使して世界中の人々と対話し、自分の考えを主張できる表現力を養う。

現代社会が包含する諸問題に関心を持ち、分析・判断・解決する能力と行動力を養う。

Ⅱ 法人の概要

1 設置する学校・学部・学科等

北陸大学

大学院 薬学研究科 薬学専攻

学部 薬学部 薬学科

未来創造学部 国際マネジメント学科

国際教養学科

未来社会創造学科

未来文化創造学科

留学生別科

2 所在地

未来創造学部、留学生別科

〒920-1180 石川県金沢市太陽が丘1丁目1番地

薬学部、大学院薬学研究科

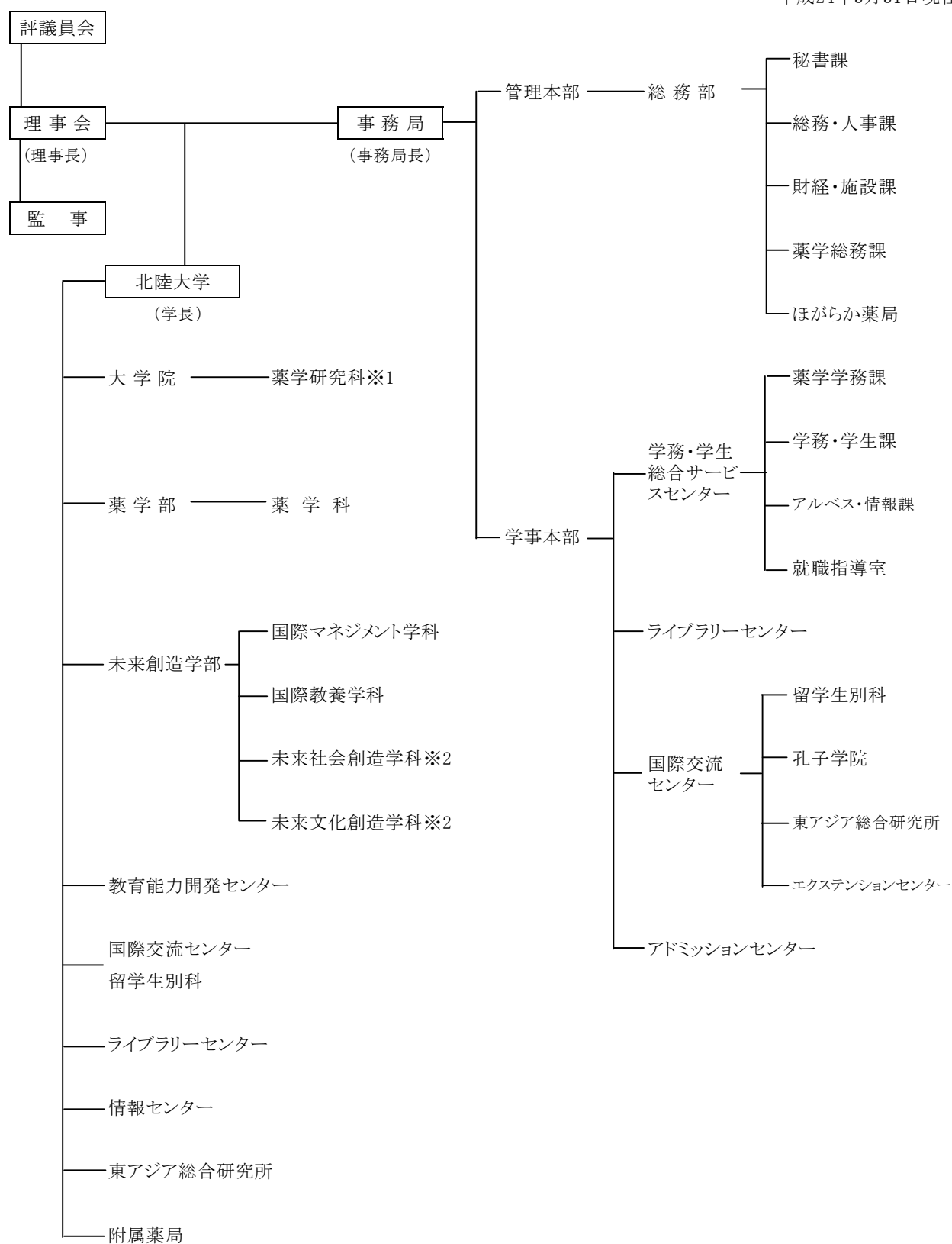
〒920-1181 石川県金沢市金川町ホ3番地

3 沿革の概略

昭和	50年	2月	学校法人松雲学園設置
		4月	北陸大学開学 薬学部開設 薬学科(定員80人)・衛生薬学科(定員60人)計140人
	51年	4月	薬学部定員増 薬学科(定員120人)・衛生薬学科(定員100人)計220人
	54年	4月	大学院薬学研究科修士課程開設(定員20人)
	58年	4月	大学院薬学研究科博士課程開設(定員5人)
	60年	7月	学校法人北陸大学に法人名称変更
	62年	4月	外国語学部開設 英米語学科(定員120人)・中国語学科(定員40人)計160人
平成	2年	4月	外国語学部臨時定員増 英米語学科(定員165人)・中国語学科(定員55人)計220人
	4年	4月	法学部開設 政治学科(定員100人・臨時定員50人)・法律学科(定員100人・臨時定員50人)計300人
	6年	4月	留学生別科開設(定員30人)
	7年	4月	外国語学部英米語学科編入学定員設定(定員35人)
	13年	4月	薬学部定員増 薬学科(定員140人)・衛生薬学科(定員140人)計280人 外国語学部定員減 英米語学科(定員120人・臨時定員15人)・中国語学科(定員40人)計175人 法学部定員減 政治学科(定員100人・臨時定員15人)・法律学科(定員120人・臨時定員15人)計250人 外国語学部中国語学科編入学定員設定(定員10人)
	15年	4月	法学部編入学定員設定 政治学科(定員40人)・法律学科(定員80人) 留学生別科定員増(定員70人)
	16年	4月	外国語学部及び法学部の未来創造学部への改組・入学定員の変更 薬学部定員増 薬学科(定員230人)・衛生薬学科(定員230人)計460人 未来創造学部開設 未来社会創造学科(定員100人・編入学定員120人) ・未来文化創造学科(定員100人・編入学定員45人)計365人
	18年	4月	6年制薬学部設置に伴う入学定員及び修業年限の変更 薬学部薬学科(入学定員306人)修業年限6年
	20年	4月	未来創造学部 新学科設置 国際教養学科(定員100人・編入学定員45人)・国際マネジメント学科(定員100人・編入学定員120人)計365人

4 組織図

平成24年3月31日現在



※1 大学院薬学研究科薬学専攻博士前期課程は、平成22年度から募集停止している。

※2 未来創造学部未来社会創造学科及び未来文化創造学科は、平成20年度から学生募集を停止している。

5 役員・教職員の概要

【役員】

理事	8人
監事	2人

【評議員】

評議員	19人
-----	-----

【教職員(専任)】

教員	129人
職員	69人

※役員・評議員・教職員数は、平成24年3月31日現在

6 設置する学校・学部・学科の名称及び入学定員と学生数

北陸大学

大学院 (単位 人)

研究科	専攻	課程	入学定員	収容定員	学生数
薬学研究科	薬学	博士後期	5	15	3

学部

学部	学科	入学定員	収容定員	学生数
薬学部	薬学科	306	1,836	1,175
未来創造学部	国際マネジメント学科	100	640	915
	国際教養学科	100	490	238
	未来社会創造学科			2
	未来文化創造学科			3
	計	200	1,130	1,158
	計	506	2,966	2,333

別科

別科	入学定員	収容定員	学生数
留学生別科	70	70	51

※学生数は、平成23年5月1日現在

※未来創造学部未来社会創造学科及び未来文化創造学科は、平成20年度から募集停止

※未来創造学部編入学定員を設定

(国際マネジメント学科120人、国際教養学科45人)

Ⅲ 事業の概要

1 事業の概況

薬学部では、6年制薬学部初めての卒業生を輩出し、201名が薬剤師として社会へと巣立った。薬学部では、医療現場で活躍できる即戦力を持つ薬剤師養成のため、教員の意識改革を図った。また、1年次生を中国へ派遣し、漢方薬局・北京薬用植物園・生薬市場等の見学、北京中医薬大学の附属病院の診察や、鍼灸・気功・吸玉などの治療の様子を見学、実際の医療現場での患者対応を学習し、東洋医薬学導入教育プログラムの充実を図った。臨床の実践的な能力を持つ医療人としての高い倫理観、使命感、責任感を持った専門薬剤師の育成を目標とした教育を推進した。施設面では、薬学キャンパスの第二薬学棟のエレベータ設備更新工事を行い、施設充実を図った。

未来創造学部は、国際マネジメント学科及び国際教養学科が完成年度を迎え、優れた英語・中国語の語学実践力を身に付け、グローバルな視野を持つ人材の育成のため、中国英語留学をはじめとする留学を推奨した。また、教育内容を充実させるため昨年に引き続き、1年次生全員を中国の姉妹校へ1カ月間派遣し、体験型学習、語学研修を行った。スポーツコースにおいては、実習面での指導体制の強化を図った。就職に関しては、総合的就職指導体制の充実を図ることにより日本人学生の内定率は96.1%と全国平均を上回った。

2 主な事業の進捗状況

当期に行った主な事業は、次のとおりである。

1. 学生募集に関する事項

(1) 本学の特色を明確かつ効果的に伝える積極的・集中的な活動

高校訪問、DM送付を継続的に実施し、教育や奨学金制度の周知徹底を図った。地元では新聞やラジオに加え、TVでの広報展開も継続し、オープンキャンパスへの参加や本学のイメージアップを図った結果、日本人の入学者は23名増加した。北海道・沖縄地区の継続的な広報活動の効果も顕著に表れ、北海道からは前年比11名増の20名、沖縄県からは前年比12名増の31名の入学者を獲得した。石川や福井では、学長を中心に教員が主体となって個別で情報交換の機会を設け、高校教諭との連携を密にし、本学の教育内容の周知に努めた。

(2) 重点地域への持続的な活動

高校教諭、生徒と直に接し、自らの足と真摯な姿勢で入学者を獲得することを基本として活動を行った。昨年度入学者が増えた沖縄県については、「北陸大学ウィーク in 那覇」の実施をはじめ、特に重点的に広報活動を行った結果、薬学部29名（前年度18名）、未来創造学部2名（同1名）の入学者を獲得した。高校・業者が主催する進学説明会、模擬講義等にも積極的に参加し、校長、進路指導担当者、クラブ顧問教諭等との信頼関係を構築し、受験推奨に繋げた。また、6つの教育提携校との取り組み、SSHや体験合宿の受け入れなど、様々な高大連携事業を実施した。入学者は薬学部183名（前年度169名）、未来創造学部日本人141名（同132名）となった。

2. 教育・研究の向上充実に関する事項

(1) 教職員の意識革新

学生の目標達成には学生の学ぶ心に火をつけることが重要である。個々の教員の教育力向上のため学長、学部長、教員相互が授業を参観し、教育の内容・指導方法に対し、適切な助言・改善指導を行った結果、学生の授業アンケートにおける教育の満足度の向上から成果が示された。個々の教員の教育力の向上に加え、全ての教職員による総合的な教育体制の観点から、薬学部では、6年制薬学部1期生を迎えた薬剤師国家試験の合格目標に対しては、教員の総合力が遺憾無く発揮でき目標が達成された。未来創造学部での全教員による教育目標は、語学教育を指標としたが今年度は達成するに至らなかった。薬学部での組織力による教育体制は一層の改善点は必要とするが評価される。一方、未来創造学部では教員の一層の意識改革により目標達成に向けての組織の再構築による総合的な教育体制の確立を学長、学部長主導により実施している。

(2) 250日教育の実施

通常の大学は、年間180日から200日を授業日数としているが、250日を授業日数とすることにより、学生は4年間で1年分、6年間で1.5年分多くの教育を享受することができる。薬学部では全学年の学力不足の学生に対し土曜日、夏季及び春季の休み期間に補講を実施した。基礎学力の補強により学生の留年抑制に成果をもたらした。更に、全学生を対象に次年度の講義予習を目的としてアドバンス講義及び映像教育を実施し学生の自主的な学びの促進に寄与した。未来創造学部では留学やインターンシップなど課外教育や教室外の活動、実体験を充実させ、健全な肉体、精神、深い思考と行動力を備えた人材育成を図り、学生の意識改革が顕著に認められた。

(3) 実学教育の実施

薬学部では『「人が生きている証＝バイタルサイン」を感じる』を実学教育の目標として1年次から病院・薬局・ドラッグストア・介護施設での早期体験学習や不自由体験を実施した。心肺蘇生法などの知識や技能習得、MTRでのバイタルサイン確認、注射剤投与・採血体験や医療面接技法などの講義を通して、チーム医療の一員としての薬剤師育成を図った。更に、人体解剖模型を用いた教育や金沢医科大学での人体解剖見学の実施により、体のつくりを知るのみならず生命の尊さや医の倫理を体得した。薬学部での臨床実学教育の成果は、学生の医療に対する意識の変革に十分な効果をもたらした。また、薬学部1年生を対象に北京語言大学や北京中医薬大学を拠点として中国語言文化研修を実施し国際的な医療人となるべき人間力を芽生えさせる効果が示された。未来創造学部では国際人養成教育として中国の姉妹校で語学や体験型の授業を受けながら、日中の異文化を体験する中国語言文化研修を実施した。学内での日中の学生交流を通して異文化間でのコミュニケーションを活発化した。その結果、学生のグローバルな思考の変化が成果として認められた。

(4) 「早寝・早起き・朝ご飯」運動の推進

健全で充実した学生生活を過ごすため、学食で朝食を100円で提供しており、利用率は年々向上している。脳を活性化させ授業に集中させるとともに、充実したキャンパスライフの実現、促進を図っている。提供食品は、栄養のバランスがとれたもので、一人暮らしの学生には特に利用されており、学生の経済負担も十分に考慮された内容になっている。今年度の朝食提供数は、太陽が丘キャンパス 33,689食（昨年度:36,136食）、薬学キャンパス 20,467食（昨年度:16,396食）であった。

(5) 「読書・運動・芸術」教育の充実

課題図書を新入生全員に配付し、読書感想文を提出させ、日常の読書習慣を付けさせた。ライブラリーセンターとの協力により、読書感想文コンクールやコメントコンクールを実施し顕彰した。その結果、物事を多面的に捉え、知性が磨かれ、想像力豊かで、自分に自信が持てる人間力豊かな学生の育成に十分な効果を示した。運動においては、入学時以上に卒業時には身体能力が上がっていることを目標に、体育実技のほかに運動部系の学生以外でも参加できるワンディフットボールやバレーボール大会、スポーツテストによる記録会を実施し身体能力の向上を図った。学生の自主的な運動への参加が成果として上げられる。芸術は、講義で基礎的な知識を学び、学外での芸術鑑賞や芸術活動を通して学生の見聞を広げることができた。

(6) 姉妹校との連携と海外研修の促進

東日本大震災、特に原発事故以降、日本の安全面に対して疑問をもつ声が高まり、日本への留学希望者数が急速に減少した。留学生募集の説明会時には各種資料を用いて正確な情報を伝えると同時に、日本の山岳地形や福島・金沢間の距離など詳しく説明し、本学の安全性を強調した。また、隔年で実施していた実務者研修会を実施し、姉妹校の担当者に本学が安全であることを実際に目で見てもらった。姉妹校教員との密な連携により、定員を確保することができた。今年度は、新たに中国の大連民族学院大学と吉林華橋外国語学院と協定を提携し、留学生の受け入れ、教育交流を推進した。一方で、従来から実施している海外研修プログラムには、派遣期間が1週間から1年間、11の国と地域へ延べ354名の学生を派遣した。グローバルな視野を持ち、貴重な異文化経験となるこれらのプログラムで学生の無限の可能性を引き出すことができた。

(7) アルベスシステム等の情報教育の充実と展開

アルベス利用を促進させるため魅力ある学生向けコンテンツの制作を実施した。特に教員との連携を強化し、アルベスの利用を前提とした授業の仕組みを構築した。薬学部では国家試験対策としてアルベスの小テスト機能を利用して、小テスト（模試）を教員が作成し、実施することにより問題点の把握、改善等を行い理解度の向上を図った。海外提携大学で遠隔講義ができない大学に対して、アルベス遠隔講義用コンテンツをDVD化し提供することにより、入学前学習の推進、遠隔講義の単位認定、教員とのコミュニケーション強化を図った。

(8) 特色ある研究の促進

文献学のような旧来型の研究方法を改め、「話せる英語教育」として実効性のある理論と実践を両輪とする、文学や言語学の領域を超える総合的・学際的研究が求められた。未来創造学部の英語教員が主体となり共同研究を行った成果を教科書として出版し、その独自性を内外に示すため、国内外を問わず広く世界にアピールすることができた。薬学部では、これまで培ってきた研究実績や成果に基づき、薬学実務実習での実技・思考を修得した学生と教員との共同研究による総合薬学研究を実施することにより臨床薬学に直結した高度な学術研究を推進することができた。

3. 学部教育の向上充実に関する事項

(1) 6年制薬剤師国家試験の全員合格対策

6年制薬学部最初の薬剤師国家試験での全員合格を目指し、学生の日線で進捗度に合わせた教育を実施した。今年度の国家試験対策として担当教員14名を選び、8月の中間試験までに基礎及び理論問題領域を中心としたまとめ講義及びベーシック講義を行い、中間試験以降に理論及び複合実践問題領域を中心としたアドバンスド講義1、アドバンスド講義2を実施した。学生一人ひとりの学習状況を日々確認し、成績下位者には当日中に学習内容を完全に

理解できるまで指導を徹底し、講義の出席が3分の2に満たない学生には厳重な指導を行った。12月以降の追い込み時期には、教員が学生と共に土日のみならず年末年始も返上で、指導を徹底した。薬学ゼミナールによる講義として特別講義（8月）、複合問題対策（10～12月）、強化講義（12月）及び直前講義（2月）を実施した。上記の結果、6年次生卒業生218名中201名が合格し、92.2%の合格率を達成することができた。

（2）共用試験全員合格対策

薬学共用試験合格の知識・技能・態度を修得するため、4月から年間を通じて実務事前学習の中で対策指導を行った。OSCEは受験生全員の合格を達成、CBTは再試験直前まで個別指導や土曜日補講などを徹底して実施した結果、96.0%の合格率を達成した。

（3）病院薬局実務実習の円滑かつ確実な実施

5年次生の実務実習は、274名を対象に薬局117施設、病院45施設で行った。教職員による各施設3回以上の定期的な施設訪問・指導により長期実務実習は円滑に実施することができた。特に、金沢医科大学病院には教員が常駐し120名の実習を無事に終了した。臨床現場における実習を通じて、薬剤師としての業務と責任などを理解し、調剤、製剤、服薬指導、健康相談、医療機関や地域との関わりについての基本的な知識、技能、態度をより深く修得することができた。また、指導薬剤師の養成のために、北陸地区調整機構、薬剤師会・病院薬剤師会等と連携し、年3回の研修会（ワークショップ）の開催に協力し、指導薬剤師及び認定薬剤師の育成に努めた。

（4）薬剤師養成専門コースの充実と実践

専門分野に合わせ、5年次から高度医療薬剤師、東洋医薬学、健康医療薬学の3コースに分かれて学習を行っている。高度医療薬剤師コースでは専門の治療分野の高度な知識と実践的な能力を修得するため、専門薬剤師や臨床試験コーディネーター等からの特別講義や現場体験、金沢医科大学病院での高度医療の病院実習を行った。東洋医薬学コースは漢方医や漢方薬局及び生薬系の製薬メーカー薬剤師からの特別講義や現場体験、中国及び韓国の医療現場や生薬市場などの体験教育を行った。健康医療薬剤師コースは予防・健康医学や感染症などを専門とする医師や研究者、科学捜査などの専門職、ドラッグストアの薬剤師からの特別講義を行い、ドラッグストアでの現場体験学習を通じてセルフメディケーションにおける薬剤師の役割及び症例や患者対応などを、PBL（Problem Based Learning）を通じて問題解決のプロセスを学んだ。

（5）ESIC（English Study In China）教育の実施

国際人養成という未来創造学部教育理念を実現するため、ESIC教育を実施した。ESICは中国の大学で英語を学ぶという留学方式であり、学習、生活の両面において日本語の通じない環境下に身を置くことにより、実践的な英語を学び鍛えることを目的としている。また、中国での生活の中で、中国語や中国文化、活力あふれる経済発展を体感することも目指している。今年度は1年次夏期62名、冬期52名が1ヵ月間のプログラムに参加した。昨年度夏期に実施した中国語言文化研修を経験した学生から3名がESICセメスター留学し、うち2名は来年度前期においてもESIC留学を継続することとなった。

(6) 話せる英語教育の実施

英語は使うものであるという意識を教員・学生ともに浸透させるため、カフェテリア内の音楽を英語放送にするなど環境を整備した。社会に出て実用英語を駆使して、グローバルに活躍できる人材を育成するため、学内の職員が学生とのコミュニケーションを英語で行う、いわば「英語学内公用語化」を図った。その一環として2号棟2階に「English Space」を開設し、教員、学生が英語で交流する機会を増やした。また、エレベータ内に「English Fountain」と題した英語クイズを掲載し、英語に面白みを感じられるよう工夫した。

(7) ゼミ教育研究活動の充実・強化

学生が自ら考え、自ら提案し、自ら行動する力を養うためプロジェクト型ゼミ教育を充実・強化した。ゼミは学生が運営し、自らの学びを高めていくとの考えから、12のゼミでゼミ研修を学生が企画し実行した。他方、学生は外に出るべきとの考えから、海外におけるゼミ研修も計画したが、実施されなかった。学生の学びに対する自覚を促すため、年度初めに1年間・4年間の学びの計画を立て、常にそれをふりかえる「パーソナル・ポートフォリオ」教育を実施した。ゼミ教員は担当する全ての学生と各学期の開始時と終了時の年間4回面談を実施し、学生の学びの充実を促した。

(8) 留学生の日本語能力の強化と日本人学生との交流の促進

留学生の日本語能力向上のため夏季の日本語集中講義を実施した。本学教員3名が担当し、日本語能力試験対策や、基本会話、文章講読等を中心とした授業及び日本語による論文、研究計画書作成支援を行った。日本人学生と留学生の交流促進、日本人学生の異文化理解能力育成、中国人留学生の日本語会話能力育成のため、1年次開講「フレッシュマンセミナー」及び「基礎演習・読書」において交流会を開催した。春季研修旅行（立山）やビーチデー、春節を祝う会などを実施し、多くの日本人学生の参加があり、交流が広がった。

(9) スポーツコースの教育の充実

未来創造学部国際マネジメント学科スポーツエリートアカデミーサッカーⅠの教育内容の充実を図り、未来のサッカーを創造する力を備えたプレイヤー、指導者を養成した。クーパーコーチングジャパンに実技を中心とした授業を委託し、実践力を身に付けさせた。夏季にはドイツで現地クラブのトレーニングに参加し、競技面と生活面の両面において、グローバルな視野を養い、広く世界で通用する人間を養成した。日々の生活から課外活動に至るまで、より高いコミュニケーションスキルを身につけるための意識付けを行い、真にリーダーシップを発揮できる人材の育成を行った。

4. 学生生活に関する事項

(1) 奨学金制度の充実

勉学やスポーツに頑張る学生及び経済的理由により修学に困難がある優れた学生を支援するため、「成績優秀者奨学金」、「資格取得奨学金」、「課外活動奨学金」、「留学生特別奨学金」、「海外留学奨励制度」、通学途中の事故を未然に防ぐためにバス通学を推奨した「バス通学奨励金」等の給付型奨学金がある。昨今の経済情勢を鑑み、社会に貢献できる有為な人材を獲得するため、入学時に認定する減免方式の奨学金制度（リーダー養成奨学金、地域奨学金等）を充実させた。

(2) 課外活動の充実

課外活動の活性化を図るため、登録費や参加費、合宿費や全国大会出場補助、定期演奏会会場利用料など費用面での支援や、学内施設・環境の充実を図り、課外活動に積極的に参加できる環境を整えた。全日本学生選手権（インカレ）常連のアイスホッケー部を筆頭に、柔道部、自転車競技部、女子サッカー部がインカレ出場を果たした。その他にトランポリン部から日本代表選手や全日本チャンピオン、卓球部からもインカレ出場選手が生まれ、強化の成果が表れてきている。全学生のうち約44%の学生がクラブに所属しており、学部別の比率では薬学部生が55%、未来創造学部生が33%となっている。文化系クラブは学外へ出向き、慰問演奏会を実施するなど積極的に活動した。

(3) 留学生の生活指導の強化

今年度は、約250名の留学生が新規に来日した。生活指導全般において、中国人教職員及び中国語が堪能な職員、先輩の留学生達を中心に支援を強化し、留学生生活を円滑にスタートできるようサポートした。在学生に対しては、ビザや資格外活動申請等の確認を徹底した。

5. 就職指導等に関する事項

(1) 総合的就職指導体制の確立

学生自身の個性や適性を発見し、キャリア形成や就職への気づきを促す進路アセスメントを初めて実施し、能動的な進路選択活動の一助とした。より広い視点からの支援のため、学生支援推進プログラム補助金から卒業生を就職相談員として雇用し、本学での学修を経て社会で働いた経験を元に、より密な学生指導を行う体制をとった。これにより、当該年度卒業者について全国平均を上回る内定率を挙げるとともに、新4年次生の円滑な活動開始を促した。

(2) 社会人基礎力の充実・強化

学生時代に身に付けるべき社会人基礎力を、学力、コミュニケーション能力、資格の3領域から支援すべく、各講座の実施・内容充実に取り組んだ。学力については、数的分野を中心とした筆記試験対策授業並びに日本語検定及びニュース検定の受検料補助による受検促進、コミュニケーション能力についてはインターンシップ及びその事前講座、並びに面接対策、ビジネスマナー等講座、資格については日商簿記、FP、ビジネス実務法務、及びITパスポートの各講座を年間通じて随時開講し、特に就職活動を行う3年次生の基礎力醸成に資した。

(3) 留学生の進路指導の強化

留学生の進路選択が多様化する中、近年増加している国内大学院受験志望者に早期の準備開始を促進すべく、大学院進学ガイダンスを実施し、具体的事項の説明と意識の啓蒙を図った。日本国内での就職希望者に対しては、就業意識やビジネスマナー、就職活動等、日本独自の考え方や方法について詳細に指導するとともに、日本人学生と同様に求人情報提供や紹介、面接対策等の個別指導をさらに推進した。

6. 施設・設備に関する事項

(1) キャンパスの整備・充実

今年度は、エネルギーの使用の合理化に関する法律（省エネ法）の改正によるCO2削減に基づき、太陽が丘キャンパス2号棟の設備改修を計画していたが、震災の影響により省電力タイプに計画を変更するため実施を見送った。薬学キャンパスにおいては第二薬学棟のエレベータ設備更新工事を行った。また、松雲会館（男子学生寮）全棟の便所・洗面所の改修工事を行った。

(2) 情報教育設備の整備・充実

平成21年度から稼動した学生支援システムは、学務システムの年度更新を実施した。今年度からは選抜システムの運用を開始し、全選抜で利用した。その他、講義室、実習室、演習室の情報機器の各種の更新を行った。

7. その他の事項

(1) 附属ほがらか薬局、附属太陽ほがらか薬局

実験科学棟にある附属ほがらか薬局は、保険薬局として処方箋による調剤や一般薬の販売を行う一方で、学生の薬局実習の場としても活用された。太陽が丘住宅地内に平成20年11月に開設した附属太陽ほがらか薬局は、学生の実習施設として活用されるほか、地域に根ざす保険薬局として地域医療へ貢献した。

(2) 東アジア総合研究所

東アジア地域における相互理解・友好促進を図るため、本学学生・教職員・一般社会人を対象に東アジアに関する公開講座、学内外での講演会、学生セミナー、文化紹介のための映画会及びホームページでのコラム掲載等を行った。また、瀋陽薬科大学、慶熙大学校、北陸大学の3大学による学生合同教育研修プログラム及び研修報告会を実施した。12月には研究活動のまとめとして「東アジアの窓第6号」を出版した。

(3) 北陸大学オープン大学

受講生に人気がある英語・韓国語の授業を、受講生のレベル・ニーズに合わせて開講した。日常生活に根ざしたテーマで、動く、造る、観るなどの体験型講座（薬草ハイキング、写真、漢方）を実施すると共に、未来創造学部教員による地域文化をテーマとした「加賀藩よろず講座」を開講し、新規受講生を多数獲得した。また、地域貢献の一環として、山中町セミナーハウスでの文化・健康・漢方をテーマにした無料講座、フットボールパークを利用したこどもサッカー教室、実験科学棟でのこども科学実験教室を開講し、地元の幅広い年齢層に対し、大学が有する様々な知識を涵養させることができた。

(4) 北陸大学孔子学院

孔子学院本部からの5名の派遣講師を加えて、目的別、ニーズ別、レベル別と受講生の多様な要望に応じた講座を開講した。南京大学との共同出版事業、高校における中国語授業や中国修学旅行事前研修などの事業を継続して行った。10月には中国浙江大学文琴芸術団公演を実施し、多くの観客を集めた。1年間の事業を通じ、地元地域の中国文化理解を促すことができた。

IV 財務の概要

1 資金収支計算

資金収支総括表

(収入の部)

(単位 百万円)

科 目	予 算	決 算	差異
学生生徒等納付金収入	4,154	4,165	△ 11
手数料収入	20	21	△ 1
寄付金収入	0	10	△ 10
補助金収入	420	420	0
資産運用収入	231	238	△ 7
資産売却収入	3,920	3,934	△ 14
事業収入	7	12	△ 5
雑収入	175	160	15
前受金収入	464	403	61
その他の収入	81	231	△ 150
資金収入調整勘定	△ 595	△ 642	47
当年度資金収入合計	8,877	8,952	△ 75
前年度繰越支払資金	1,282	1,282	0
収入の部合計	10,159	10,234	△ 75

当年度資金収入合計は、その他の収入の増加等により75百万円予算を上回る。

(支出の部)

科 目	予 算	決 算	差異
人件費支出	2,237	2,170	67
教育研究経費支出	1,998	1,792	206
管理経費支出	766	695	71
借入金等返済支出	2	1	1
施設関係支出	50	44	6
設備関係支出	146	76	70
資産運用支出	2,610	2,606	4
その他の支出	130	121	9
予備費	241	0	241
資金支出調整勘定	△ 49	△ 93	44
当年度資金支出合計	8,131	7,412	719
次年度繰越支払資金	2,028	2,822	△ 794
支出の部合計	10,159	10,234	△ 75

当年度資金支出合計は、経費及び予備費の未使用等により719百万円予算を下回る。

次年度繰越支払資金は、794百万円予算を上回る。

当年度資金収支差額	746	1,540	△ 794
-----------	-----	-------	-------

(注) 上記の表の金額は、百万円未満を四捨五入する。なお、以下の表についても同様である。

2 消費収支計算

消費収支総括表

(消費収入の部)

(単位 百万円)

科 目	予 算	決 算	差異
学 生 生 徒 等 納 付 金	4,154	4,166	△ 12
手 数 料	20	21	△ 1
寄 付 金	0	13	△ 13
補 助 金	420	420	0
資 産 運 用 収 入	231	238	△ 7
資 産 売 却 差 額	32	35	△ 3
事 業 収 入	7	12	△ 5
雑 収 入	175	160	15
帰 属 収 入 合 計	5,039	5,065	△ 26
基 本 金 組 入 額 合 計	△ 373	△ 344	△ 29
消 費 収 入 の 部 合 計	4,666	4,721	△ 55

消費収入の部
合計は、基本金
組入額合計の減
少等により55百
万円予算を上回
る。

(消費支出の部)

科 目	予 算	決 算	差異
人 件 費	2,257	2,180	77
教 育 研 究 経 費	2,588	2,347	241
(内 減 価 償 却 額)	590	556	34
管 理 経 費	877	801	76
(内 減 価 償 却 額)	110	105	5
資 産 処 分 差 額	7	10	△ 3
徴収不能引当金等繰入額	22	22	0
予 備 費	235	0	235
消 費 支 出 の 部 合 計	5,986	5,360	626

経費及び予備
費の未使用等
により、消費支
出の部の合計
は626百万円
予算を下回る。

上記の結果、
帰属収支差額は
652百万円予算
より改善した。
また、当年度消
費収支差額は
639百万円の支
出超過となる。

帰 属 収 支 差 額	△ 947	△ 295	△ 652
当 年 度 消 費 収 支 差 額	△ 1,320	△ 639	
前年度繰越消費収入超過額	96	96	
基 本 金 取 崩 額	0	1	
翌年度繰越消費支出超過額	1,224	542	

(注)帰属収支差額＝帰属収入－消費支出

3 貸借対照表

貸借対照表

資産の部

(単位 百万円)

科 目		本年度末	前年度末	増 減
資 産	固定資産	31,904	33,758	△ 1,854
	有形固定資産	17,260	17,817	△ 557
	その他の固定資産	14,644	15,941	△ 1,297
	流動資産	3,112	1,599	1,513
合 計		35,016	35,357	△ 341

その他の固定資産の有価証券の償還により流動資産が増加した。

負債の部、基本金の部、消費収支差額の部

科 目		本年度末	前年度末	増 減
負 債	固定負債	1,053	1,043	10
	流動負債	492	548	△ 56
	計	1,545	1,591	△ 46
基本金		34,013	33,670	343
消費収支差額		△ 542	96	△ 638
合 計		35,016	35,357	△ 341

正味資産	33,471	33,766	△ 295
減価償却累計額	10,223	9,747	476

正味資産＝資産－負債（＝基本金＋消費収支差額）